

INFORMATION



《速報》

■本佐倉城跡東光寺ビョウ出土「鑄棹」



中世の日本は自国の通貨をもたず、主に中国から輸入した渡来銭を使用していました。このため国内では渡来銭の不足を補うため、そのコピーである模鑄銭がつくれ、渡来銭とともに流通していたと考えられています。近年では発掘調査によって京都、鎌倉、堺、博多で鑄型が発見され、茨城県東海村でも枝銭が出土しており、各地で模鑄銭を鑄造していたことが実証されています。

写真は本佐倉城跡から出土した鑄棹です。鑄棹は銅が型の流路内（湯道）で凝固したもので、枝銭から個々の銭を切り離れた後に残った部分です。本佐倉城から出土した資料は長さ5.4cm、幅1.4cm、厚さ0.6cmの破片で、左右3箇所には堰が段違いに配置されています。残念ながら、いつ頃のものかわかりませんが、本佐倉城内においても鑄物師を招いて銭を鑄造していたのでしょうか。

《発掘中の遺跡》

＜成田市＞

南羽鳥花輪内遺跡（縄文時代、中世）

＜四街道市＞

笹目沢Ⅰ・Ⅱ遺跡（縄文、奈良・平安時代、中近世）

がんばってます！

《室内作業》

＜本部統合事務所＞

佐倉市鍋木町198-3 TEL.043-484-0133

台方下平Ⅰ・Ⅱ遺跡（成田市 旧石器～平安時代）

大竹林畑遺跡（成田市 古墳～平安時代）

白井屋敷跡遺跡（佐倉市 縄文時代～中近世）

＜佐倉南統合調査室＞

佐倉市岩富町538-1 TEL.043-498-0765

宮内井戸作遺跡（佐倉市 旧石器時代～中近世）

内田端山越遺跡（佐倉市 旧石器時代～中近世）

こつちもやってます！

《ご案内》

■企画展「開園！印旛動物園ーいにしへの動物たちー」開催中！！

当センター考古資料展示室にて、平成19年1月15日(月)より6月29日(金)まで企画展を開催しています。当センターのシンボルにもなっているムササビ形埴輪をはじめ縄文時代から奈良・平安時代にかけて作られた様々な動物形製品を展示しています。表情豊かな動物たちを是非ご覧になってください。

土日祝閉館、入場無料。



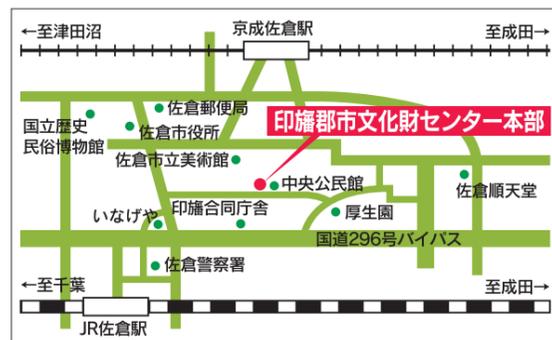
《お詫び》

VOL.23の「佐倉市井野長割遺跡のイノシシ形土製品」の文章中に誤りがありましたのでここに訂正し、お詫び申し上げます。

「北海道日の浜遺跡例の早期のものが最古」とありますが、晩期の間違いです。現段階では最古のイノシシ形土製品は断定することはできませんが、中期初頭（五領ヶ台式期）の可能性が指摘されている千葉県八千代市上谷遺跡例は最古級と言えます。

《おしらせ》

※上記の発掘現場、室内作業は見学できます。ご期待に添えない場合もありますので、かならず、事前にご連絡ください。詳細は本部へお問い合わせを！



発行・編集 フィールドブックvol.24 発行・編集 財団法人 印旛郡市文化財センター 〒285-0025 千葉県佐倉市鍋木町198-3 ☎ 043(484)0126(代) 043(485)9871 平成19年3月15日 http://www.inba.or.jp (ホームページ) http://www.inba.or.jp/



いんざいし いけのした いせき
印西市池ノ下遺跡

池ノ下遺跡は印西市別所字池下に所在する、標高22～26mの台地上に立地しており、遺跡の南側には手賀沼に注ぐ亀成川が流れています。今回の調査は道路の建設に伴い、まず9,269m²を対象とした確認調査を行い、その内4,650m²について本調査を行いました。

調査の結果、奈良・平安時代の竪穴住居跡14軒、掘立柱建物跡10棟、製鉄炉1基、中・近世の地下式坑2基、溝7条、縄文時代～近世の土坑43基が検出され、縄文土器、奈良・平安時代の須恵器、土師器（墨書土器）、灰釉陶器、瓦、刀子、砥石、鞆の羽口、鉄滓などが出土しました。

掘立柱建物跡のうち、1棟は四面に廂を持つ四面廂建物で、集落内の有力者の住んだ建物、あるいは村落内寺院と呼ばれるお堂のような性格が考えられます。

製鉄炉からは多量の鉄滓と共に羽口が数点出土しました。炉の構築材は壊されたためか残っていませんでしたが、底面の一部が赤く硬化していました。近くの竪穴住居跡からも多量の鉄滓が出土しており、製鉄に携わった工人の住居兼作業場であったのかもしれない。

出土遺物では、カマドの中から出土した瓦が注目されます。この瓦はカマドの燃焼部から立った状態で出土したもので、意図的に置かれたものと考えられます。その出土状況から支脚として用いた、あるいは竈神を封じ込めるような祭祀を行ったと想像されます。さらに、この瓦は池ノ下遺跡の西約900mに位置する木下別所廃寺に葺かれた瓦と同じ作りのもので、木下別所廃寺又はその瓦を焼いた曾谷ノ窪瓦窯跡から持ち込んだものと推測できるでしょう。

このように、池ノ下遺跡の調査で奈良・平安時代の人々の生活を示すと共に、製鉄といった生業や信仰、周辺の遺跡との繋がりを示す資料が得られたことは、大きな成果と言えます。



池ノ下遺跡全景



製鉄炉



瓦出土状況

さかえ まち まえ はら いち い せき

栄町前原Ⅰ遺跡



前原Ⅰ遺跡は印旛郡栄町龍角寺字前原に所在し、遺跡の周囲は「千葉県立房総のむら」として人々の憩いの場となっています。この房総のむら内には印波国造の墓とされる竜角寺古墳群が分布しており、前原Ⅰ遺跡から南東約400mには一辺85mの大方墳として有名な岩屋古墳が位置しています。また、北約800mには下総国最古の寺院跡である龍角寺が位置することなどから、周辺は古墳時代の印波国において中心となる地域であったと考えられています。

本遺跡は昭和55年の道路建設時に調査が行われており、古墳時代中期の竪穴住居跡5軒、古墳時代後期の方墳1基などが検出されていました。今回はその道路に面した台地縁辺付近の1,730m²を対象に調査が行われ、古墳時代中期の竪穴住居跡6軒、土坑14基、溝1条を検出し、土師器や刀子、土玉、滑石模造品とその未成品など多くの遺物が出土しました。

検出された6軒の住居跡の内、3軒（1・3・5号住居跡）から滑石製品の製作時に出る未成品や剥片、原石などが出土したことから、この3軒は滑石製品を作った工房跡であったと考えられます。過去の調査では他にも滑石工房跡が1軒検出されており、本遺跡では併せて4軒の工房跡が確認できます。

今回の調査区から出土した滑石（未成品、原石、荒割片、板状片、剥片）は2,619点を数え、その内1号住居跡から1,123点、3号住居跡から1,411点とこの2軒の住居跡から特に多く出土していることが認められます。昭和55年に調査された1号住居跡の南側半分でも滑石が多数出土していましたので、併せると更に多くの滑石が出土していることとなります。

出土した未成品には白玉、有孔円盤、剣形、管玉、勾玉、紡錘車があり、なかでも白玉、有孔円盤、剣形の出土が多く、その製作工程を復元することができます。

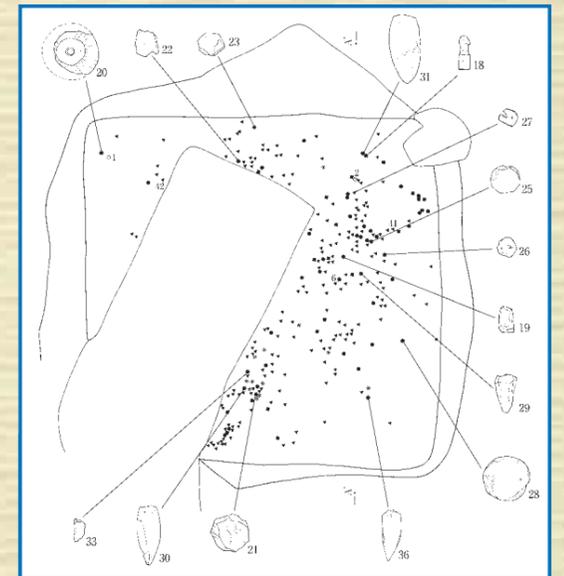
【白玉】 原石から板状の素材を作り、それを円形に細かく割り、穿孔し、研磨して仕上げる。

【有孔円盤・剣形】 ①原石から板状の素材を作り、それを円形・剣形に割り、穿孔し、研磨して仕上げる、②原石を荒割して円形・剣形に整え、表面を整形して穿孔し、研磨して仕上げる、という2種類の製作方法が考えられます。

竜角寺古墳群が営まれる以前の古墳時代中期において、この集落では滑石製品を大量に製作している様相が明らかとされました。こうしたことは当時のモノの生産・流通を考える貴重な資料となるとともに、竜角寺古墳群の出現へと繋がる人々の歴史を探る大きな手がかりとなるでしょう。



3号住居跡 遺物出土状況



3号住居跡 遺物出土状況図



航空撮影

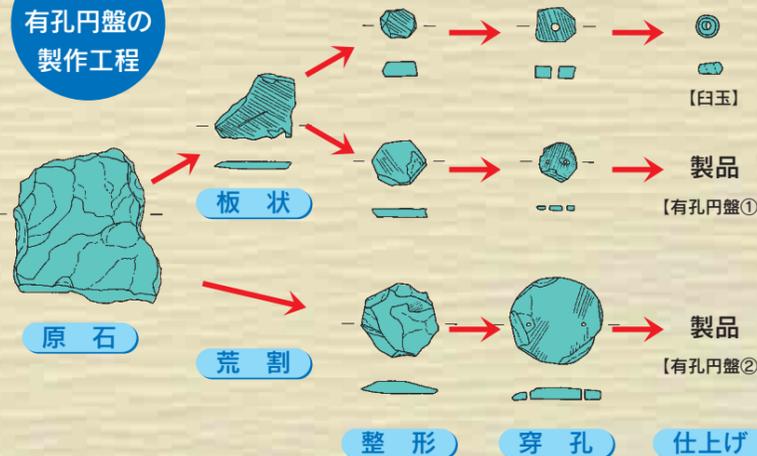


S55年度調査区

H18年度調査区

滑石工房跡

白玉・有孔円盤の製作工程



3号住居跡 出土滑石